

## 依頼場面における理由提示形式

### －「から」の待遇上の制約－

田中 久美子

#### 要 旨

アンケート調査で得た日本語母語話者の発話データを分析した結果、「から」「ので」「て」等の理由提示形式の選択には、聞き手と話し手の距離、発話が聞き手に与える負担の有無、負担の大小などが大きくかかわっており、その結果、「から」の使用には、強い待遇上の制約があることが明らかになった。

一方、同じ調査における中上級日本語学習者の回答では、この制約に反した「から」の使用がかなり見られた。これは、従来の日本語教育において、「から」は依頼文に先行するという文法的観点からの指導が強調され、聞き手に対する待遇的配慮という観点が重視されていないことの弊害ではないかと考える。

[キーワード] ～から、待遇上の制約、遠慮度

#### 1. はじめに

「頭が痛いですから、帰らせてください。」

「先生、すみません。暑いんですから、冷房をつけていただけませんか。」  
日本語学習者の上のような発話における「から」の使用は、文法的に間違いだとは言えないが、聞き手に不快な印象を与える可能性が大きく、待遇表現上<sup>(1)</sup>不適切であると考えられる。

共通語の話し言葉において、「から」の使用は、待遇表現上、どのように制約されるのであろうか。

この点を明らかにするために、「詫び」「依頼」「断り」場面における理由提示には、どのような形式が使用されるか、アンケート調査を行った。この3場面を対象としたのは、これらの場面では、聞き手との円滑な対人関係を保つために、待遇的配慮が強く求められ、配慮を欠けば、摩擦を生じる危険性があると思われるためである。

本稿では、「依頼」場面の調査結果を報告し、日本語母語話者の理由提示形

式の使い分けに、聞き手に対する待遇的配慮がどのようにかわるのか、学習者の形式選択にはどのような問題があるのかを考察する。

## 2. 調査の概要<sup>(2)</sup>

### 2-1 被調査者

東京、千葉、神奈川、埼玉在住の成人日本語母語話者、および中上級日本語学習者

### 2-2 調査方法

調査用紙に、待遇的配慮にかかわる変数（聞き手と話し手の関係、聞き手に与える負担）の異なる場面を示し、その場において、回答者ならどのような発話をするか、自由に記述してもらった。また同時に、その発話に際して、どの程度、遠慮や改まりを感じるかを

0：感じない（遠慮がなく気楽に言える）、1：少し感じる、

2：かなり感じる、3：非常に感じる（とても遠慮を感じて話しにくい）、

以上の4段階で示してもらった。<sup>(3)</sup>

## 3. 分析方法

### 3-1 分析対象

<日本語母語話者>

①本調査：男女各75名、計150名。年代別の内訳は20代53名、30代40名、50&60代26名。職業別内訳は、会社員77名、教員24名、自由業3名、主婦20名、学生23名、無職3名。

②追加調査：男性6名、女性26名の合計32名

<日本語学習者>男性61名、女性89名 計150名。その内訳は、日本語学校学生71名、大学および大学院留学生61名、日本語教師10名、会社員8名である。国籍は、韓国と中国の学習者が各53名、その他16か国46名である。<sup>(4)</sup>

### 3-2 分析の手順

設問毎に、回答中の理由を述べた部分（節あるいは文）に使用された理由提示形式を抽出した。例えば、「胃の検査があって何も食べられないので、今晚は失礼させていただきます。」という回答は、「胃の検査」について「～て」で、「食べられないこと」について「ので」で提示されているというように、提示さ

れている内容別に、形式を抽出。次に、理由提示のある節末、もしくは、文末に使用されている形式（上の例では「ので」）について使用率を出した。

また、回答者の示した「遠慮や改まりをどの程度感じるか」の数値(0～3)を設問毎に平均し、遠慮の意識が理由提示形式の選択にどうかかわっているかをみるための参考とした。(この平均値を以後「遠慮度」と呼ぶ。)

### 3-3 形式の分類

日本語母語話者の回答から、理由提示形式を、以下のように分類した。

「～ので」、「～から」、「～のだから」、「～もので」、「～ものだから」、「～し」、「～ため」、「～で」、「～のだが」、「～て」、「連用中止」、「言いよどみ」、「～の／のだ」、「0形」、「理由提示無し」、「不言」

※1. 分類上「の」としたものには撥音化した「ん」を、また「だ」としたものには丁寧体「です」の回答も含む。(例: 「～ものだから」の分類には「～もんだから」、「～もんですから」、「～ものですから」を含む)

※2. 分類のうち、筆者が便宜上名付けた形式について説明しておく。

「～で」: 格助詞「で」を用いた形式(事故で遅れました)

「～のだが」: 「のだけれども」「のだけど」「のだけれど」「のだけども」を含む

「～て」: 活用語連用形+て/で

「連用中止」: 活用語の連用中止形

「言いよどみ」: 「今日は病院へ行きますので・・・」というような接続助詞及び原因・理由を提示する格助詞「で」の言いさしではなく「今日は病院へ・・・」のように途中で言いよどんだ形式。

「～の／のだ」: 「タバコの煙りに弱いの。」「煙りが苦手なんだ。」のような形式で、「煙りが苦手なんだよ。」のように、後に終助詞「よ」「よね」を伴ったものも含んだ。

「0形」: 言い切りの文で、文末に「のだ/ためだ/せいだ」のような理由を表す形式名詞や準体助詞を含まない形式。

「理由提示無し」: 回答はあるが、その中に理由を述べていないもの。

「不言」: 自分はこのような場面で、その発話をしないと書いた回答で、無回答とは異なる。

## 4. 調査結果

### 4-1 設問別結果

※< >内は、調査用紙に提示した設問文。

#### 設問①：同位<sup>(5)</sup>の聞き手に対する依頼

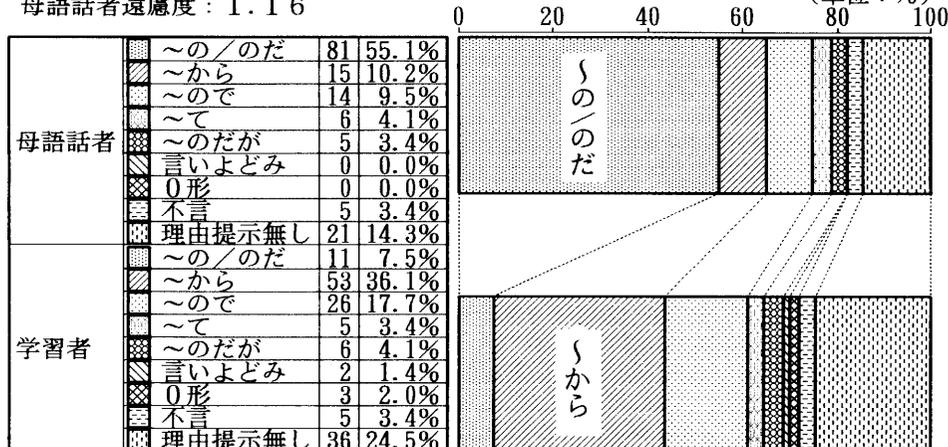
<あなたの隣にいる友達がポケットからタバコを出し、吸おうとしています。あなたはタバコの煙を吸うと、頭が痛くなります。友達に吸わないよう頼んでください。>

(図1)

<①同位の聞き手への依頼>

母語話者遠慮度：1.16

(単位：%)



母語話者の回答では、「の／のだ」(悪いけど、タバコだめなんだ。後で一人ですってくれよ。)の使用率が55.1%と圧倒的に高く、「～から」(悪いけど、煙が苦手だから、タバコがまんしてくれる。)と「～ので」(タバコの煙で頭痛くなっちゃうんで、ちょっと吸うの遠慮してもらえる。)は、10%前後の使用率であった。これに対し、学習者の回答では、「～から」が36.1%と最も多く、「～の／のだ」はわずか7.5%である。

※各形式の後の( )内に示したのは回答の1例。

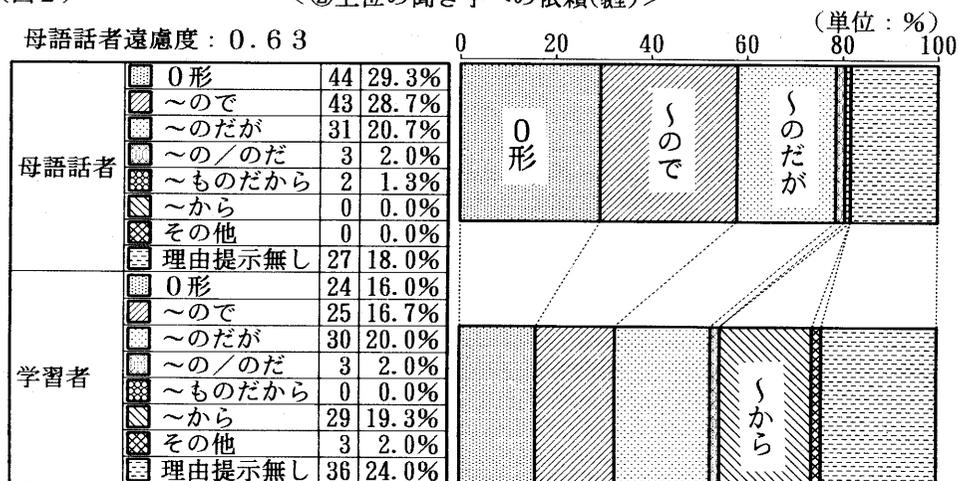
#### 設問②：上位の聞き手に対する依頼 (次ページ図2)

<教室で先生がテープを聞かせ始めましたが、音が小さいため、後ろの席にいるあなたにはよく聞こえません。先生に、音を大きくしてくれるように言ってください。>

母語話者の回答では、「0形」(先生、聞こえません。)、「～ので」(聞こえないので、もう少し大きくしてください。)、「～のだが」(すみません。音が小さいんですが、もう少し大きくしていただけますか。)の使用率が高く、「～から」の使用は0である。

学習者の回答では、「～から」(先生、よく聞こえませんから、音を大きくしていただけますか。)が、19.3%と高くなっている。

(図2) <②上位の聞き手への依頼(難)>

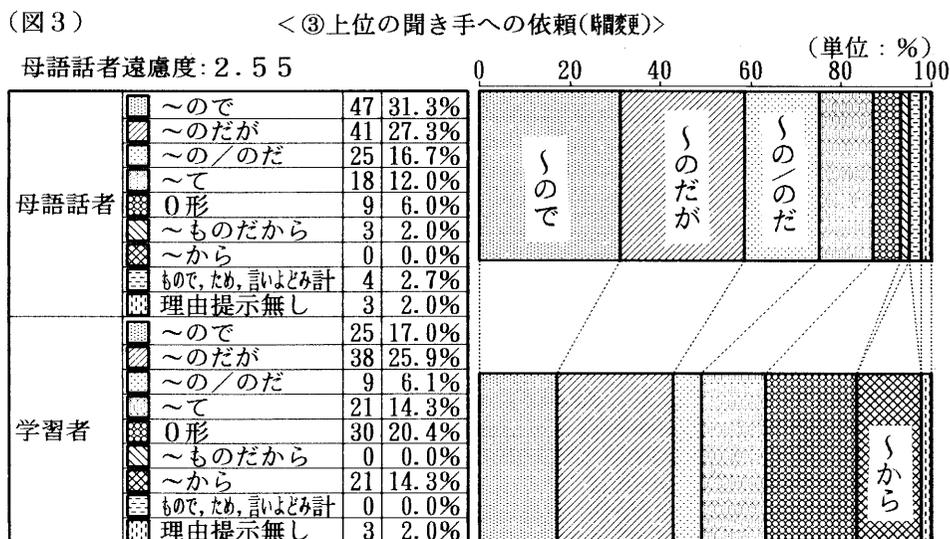


### 設問③：上位の聞き手に対する依頼

<あなたは明日10時に、就職の相談のため、先輩のAさんと会う約束をしています(あなたはAさんに仕事を紹介してもらいたいと思っています)。しかし、夜になって歯がひどく痛みだしたため、明日の朝早く病院へ行きたいと思います。Aさんに電話をして約束を午後に変えてもらえないか頼んでください。>

母語話者の回答では、「～ので」(歯が痛みだしてしまって、朝一番で病院へ行って来たいので、～を変えていただけますか。)と、「～のだが」(実は歯がひどく痛みだしまして、朝病院へ行きたいんですが、～していただけますでしょうか。)が、それぞれ30%前後の使用率となっており、「～から」の使用は0であった。これに対し、学習者の回答では、「～から」(歯がひどく

痛みだしましたから、明日の約束を変えていただけませんか。)の使用が、14.3%見られた。



## 4-2 結果総括

以上の結果から、母語話者の「～から」の使用についてまとめると、

(1)聞き手が上位である場合は、遠慮度の大小にかかわらず、「～から」は使用されていない。設問②の遠慮度は0.63と低いが、「～から」の使用は、0であった。

(2)同位の聞き手に対しては、「～から」が使用されているが、使用率10.2%は高い比率ではない。これは、話し手の利益のために、聞き手にとって、負担となり得る依頼をすることに遠慮を感じる人が少なくないことによると考えられる。この設問の遠慮度は1.71で、教師に対する依頼の0.63と比べてかなり高い遠慮度である。

本調査の設問では、同位の聞き手に対する依頼が、設問①のみで、負担の大小が「～から」の使用にどのように影響するかを見ることができなかった。

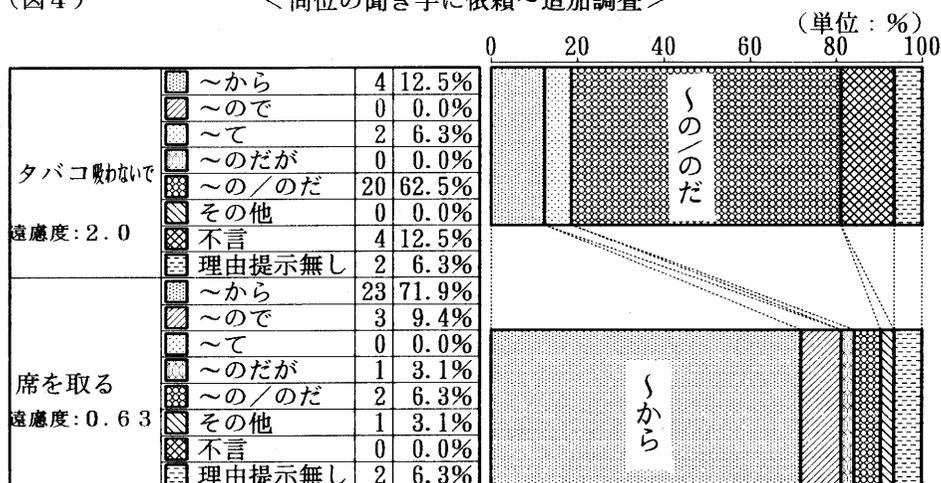
この点を明らかにするため、改めて追加調査に以下の設問を加え、確認するこ

とにした。

追加設問：同位の聞き手に対する負担の小さい依頼

<近くのレストランで昼食をとることになったが、あなたは食事の前にコピーをするつもりだ。友達に先に行って席をとっておいてくれるよう言ってください。>

(図4) <同位の聞き手に依頼～追加調査>



「タバコ」の依頼における遠慮度は2.0で、「～から」使用率が12.5%であるのに対し、「席を取る」依頼の遠慮度は0.63で、「～から」の使用率が71.9%であった。聞き手に与える負担が小さく、遠慮度が低くなると「～から」の使用が多くなると言えるだろう。

本調査及び追加調査の結果から、依頼場面における「から」の使用の制約を以下のようにまとめる。

(1) 上位の聞き手に対する依頼においては、聞き手に与える負担の大小にかかわらず、「から」の使用が避けられる。

※本調査の「断り」場面の調査結果から、上位の聞き手に対する発話であっても、その発話が聞き手の負担を軽減する、聞き手の利益になる発話である場合には、積極的に「～から」が使用されるということが明らかになったが、「依頼」は、基本的に、聞き手に負担を与えるものであると考える。

(2)同位の聞き手に対する依頼においては、聞き手に与える負担が大きくなるほど、遠慮の意識が強くなり、「から」の使用が少なくなる。

尚、母語話者については、男女別、年代別の分析も行ったが、「～から」の使用傾向については、特徴的な違いというものは見られなかった。

## 5. 学習者の問題点

### 5-1 「～から」

学習者は、母語話者の回答に「～から」の使用がみられないところにその使用が見られ、待遇上の使用の制約を認識していない学習者のいることが明らかである。(ちなみに、設問②において、依頼文にどのような文型を用いているか分析した結果、「～から」を用いた回答の70%以上が、「～から、～していただけませんか」という丁寧な依頼文型を用いており、学習者の意識としては丁寧であろうとしているのだということがうかがえる。)

また、学習者の回答において「～から」で分類した中には、次のような「～のだから」の使用があった。

設問① (すみませんが、わたしはタバコの煙りに非常に弱いんですから、できれば吸わないでください。) 3例

設問② (すみませんが、よく聞こえないんですから、ちょっと音を大きくしていただけませんか) 2例

設問③ (～歯が痛くて病院へ行かないとだめなんですから、よろしかったら約束時間を午後にしたいんです。) 4例

田野村(1990)は、「「PのだからQ」は、「Pであるからには、当然、Q」と言った意味を表す。後続するQが聞き手にとって無益なことがらである場合配慮を欠く一方的な話し方として受け止められやすい。」(P105)と説明している。

今回の調査においては、目立つ数ではなかったものの、聞き手に失礼な印象を与え、摩擦を生じるという点において、問題が重大で無視できない。

### 5-2 その他の問題点

調査の結果、学習者にとっては、「の」適切な運用が難しく、そのことが「～の／のだ」の使用が極めて少なく、「～から」や「O形」が多くなるという

結果にもつながっていると考えられる。また、学習者の分類で「～のだが」に入れた回答の中に、「の」の脱落した回答（母語話者が「よく聞こえないんですけど。」と言っているところを、「先生、ちょっと聞こえませんが。大きくしてくれませんか。」としたような回答）が非常に目立った。

この、「の」の非用の考察については別稿に譲ることにする。

## 6. おわりに

最後に、学習者の不適切な「～から」の使用を生む要因が、日本語の教科書自体にもあるということを指摘しておきたい。

文型を重視した日本語初級教科書では、「から」の後には、依頼・命令・誘い・意志・許可・事実の陳述の文が、「ので」の後には、事実の陳述文が続くという区別によって導入が行われている。

また、『教師用日本語教育ハンドブック③文法I』には「「て」「ので」などは、述語に制約があるが、「から」の場合は後件に制約がおよぶこともなく、用法が自由である。初級の学習者には「～から」を使うよう指導する方が有要だ」（p207~209要旨）といった指摘がある。多くの日本語初級教科書で「～から」が早い時期に導入され、「ので」が遅れて導入されるのは、このような理由によるのであろう。確かに、「～から」は、文法的な観点に立てば、制約なく理由提示の形式としてどんな文でも使えるのだが、待遇表現の観点からみると、その使用に制約があることが考慮されていない。

今回の調査は、学習者が「～から」を文法的に正確に使用しても、それが母語話者の使用とは異なったものになっているという実態があり、日本語教育における理由提示形式の指導には、待遇表現の観点からの指導が必要であることを、実証的に示すことができたのではないかと考える。今後さらに、音声を伴うデータを収集して、母語話者の使用の実態について考察していきたい。

### 【注】

- (1)待遇表現とは、蒲谷(1993)の定義を借りれば、「ある表現主体が、ある表現意図を持ち、自分・相手・話題の人物相互の人間関係を認識し、場の状

況・雰囲気、文脈などを意識し、表現形態を考慮し、以上の制約に応じた題材・内容、適当な言材を選択し、文話を構成し、媒材化する」表現行為である。

(2)調査の詳細については田中(1995)参照

(3)調査用紙の内容は母語話者、学習者同一のものだが、学習者のものには部分的に仮名を振った。また、回答者に対しては、調査の目的を「話し言葉の調査」であるとだけ伝え、理由を提示するようという指示も与えていない。

(4)学習者の日本語学習暦は1年以上で、滞日年数は5年未満。

(5)「同位」:友人のように話し手にとって上でも下でもなく、一般的にくだけた言葉で話せる相手

「上位」:一般的には「です・ます体」で話し、上に処遇する相手

「同位」「上位」というのは筆者が便宜上、名付けたもの。

この調査では、話し手が自分の下に処遇する聞き手は、変数として扱わなかった。

#### 【主な参考文献】

尾方理恵(1993)「『から』と『ので』の使い分け」『国語研究』(明治書院)

蒲谷宏・坂本恵(1993)「待遇表現教育の構想」『早稲田大学日本語研究教育センター紀要』3

熊井浩子(1992)「外国人の待遇行動の分析(2)―依頼行動を中心に―」『静岡大学教養部研究報告人文・社会科学篇』第28巻第1号

熊井浩子(1993)「外国人の待遇行動の分析(2)―断り行動を中心に―」『静岡大学教養部研究報告人文・社会科学篇』第28巻第2号

熊取谷哲夫(1993)「発話行為対照研究のための統合的アプローチ―日英語の「詫び」を例に―」『日本語教育』79号

鈴木忍(1978)『教師用日本語教育ハンドブック③文法I 助詞の諸問題1』(国際交流基金)

田中久美子(1995)「待遇表現から見た理由提示形式―「から」の制約を中心に―」平成6年度お茶の水女子大学大学院修士論文

田野村忠温(1990)『現代日本語の文法I「のだ」の意味と用法』(和泉選書)

趙順文(1988)「『から』と『ので』永野説を解釈する―」『日本語学』7月号

- 鶴田庸子(1992)「日本語教育のためのカラとノデ:『相手支持』か『自分支持』か」『Language Teacher』16-4 April
- 永野賢(1952)「『から』と『ので』とはどう違うか」『国語と国文学』29-2
- 永野賢(1988)「再説・『から』と『ので』とはどう違うか—趙順文氏への批判をふまえて」『日本語学』12月号 67-83頁
- 花井裕(1990)「『ので』の情報領域—『から』の対話性と比較して」『阪大日本語研究』2
- 水谷信子(1989)「待遇表現指導の方法」『日本語教育』第69号
- <日本語教科書>
- 『新日本語の基礎ⅠⅡ』海外技術者研修協会編(スリーエーネットワーク)
- 『日本語表現文型中級Ⅱ』(1983)筑波大学日本語教育研究会(凡人社)
- 『日本語初歩』改訂版(1985)国際交流基金(凡人社)

(お茶の水女子大学大学院修士課程修了生)